平成22年度	湘南白百合学園中学校（国語）	解答と解説

解 答

一

1　朗読　2　博識　3　快　4　損　5　臨
6　ごこく　7　ひたい　8　ふようじょう　9　そむ　10　じゅうだん

二

1　ウ　2　イ　3　ア

三

問一　ぼくは
問二　1　時間が　2　もう一つの　3　猫の体の中を

四

1　貧富　2　善悪　3　利害　4　勝敗　5　呼吸

五

問一　A　エ　B　ウ
問二　みんながたいくつでこまり、からだの中に力がうずうずして冒険みたいなことがしたいと思っていたところで、かなり遠くの新舞子に見世物を見に行くことはまさに自分たちがしたかったことだと思ったから。
問三　オ
問四　エ
問五　きつねのように見える
問六　うそつきの太郎左右衛門の言葉を信用してさんざんな目にあったので、太郎左右衛門への疑いと、疲れ、知らない遠くの町の夜闇からくる不安とで緊張していたが、太郎左右衛門の親せきの家にたどり着き、救われたとほっとして気が抜けた。
問七　イ・エ
問八　エ

六

問一　〔スタシャックさんは〕収容所を脱出し、数人の仲間と一緒に村人に匿われて、自由を得た。
問二　ナチスの狂気と残ぎゃく性
問三　（Ⅰ）　殺害、餓死、病死などの恐怖
　　（Ⅱ）　どんなに過酷な状況にあっても、人間が生き抜くための大きなエネルギー源となるもの。
問四　最近の若者たちに、あふれんばかりの夢や希望があるということ。
問五　ア
問六　ア　○　イ　○　ウ　×　エ　×

解 説

五

問二　太郎左衛門が来る前のみんなの心情は、「みんなは、この世が～あたえたいのであった。（本文４～６行目）」に述べられています。また、傍線①の直後には「みんなのからだの中には、力がうずうずしていた。」とあります。これらから、太郎左衛門の話した「大きなくじらが新舞子（かなり遠くの海岸）で見世物になっている」という内容が、どれほど魅力的だったかがわかりますね。解答に必須の要素は、「平凡な日々にうんざりしていた」「冒険みたいなことがしたかった」「力がうずうずしていた」「（くじらの）見世物を見に遠くまで行くことはまさに自分たちのやりたい事だった」です。これらを一文にまとめましょう。
問三　「命令をうけているもののように先へ進んでいった」という比喩表現は、ここでは「先へ進むことがまるで果たすべき責務であるかのようだった」という意味で使われています。実際は疲れ果ててもう歩きたくないのだけれど、励ましあい制しあってここまで来た仲間たちの手前、自分からそんなことを言い出すなんてことはできせません。皆がそういう思いで必死に前進し続けているのがこの場面です。従って答えはオとなります。
問四　太郎左衛門は当然、くじらなどいないことを知っていました。それなのに嘘をつき、その嘘にみんなが乗ったために大変な事態がおきてしまったわけですから、ここでの太郎左衛門は責任を感じていますし、事態を打開する方法を考えてもいます。実際このすぐあとに「近くに親戚の家があるからまずそこへ行き、電車で送ってもらおう」と提案しており、その話は嘘でなかったことから、正しくない選択肢はエだとわかります。
問五　答えの箇所は５ページ１２行目にあります。なぜ「きつね」なのかと唐突に感じるかもしれませんが、昔から日本では「きつね」は他の物に化けるとか、人をだましたり悪さをしたりすることがあると信じられてきました。で

すから「嘘つきで信用できない」「へんでわけのわからん」太郎左衛門の顔がきつねに見えたのです。

問六　傍線⑤の直前に「久助君は、救われたと、思った。」とあります。それまでは①自分たちをだましてひどい目にあわせた太郎左衛門をもう一度信用していいものかという疑い、たよりなさ②疲れ③知らない町を夜さまよっている心細さ、不安、緊張…でいっぱいでした。ですからやっと「救われた」と思えた瞬間、それまでの反動で気が抜け、体に力が入らなくなってしまったのです。

六

問一　問題文に「収容所に入れられてから戦争が終わるまでのスタシャックさんの人生について、事実だけを簡潔に」とありますので、戦後のことやスタシャックさんの心情まで書いてしまわないよう気をつけましょう。本文８ページ１７～１８行目「収容所を脱出し、数人の仲間と一緒に村人に匿われて、やっと自由を得た。」が答えの要素となります。

問二　傍線①の直前に「彼女はユダヤ人ではなかったが、ナチスの余りにもむごい残ぎゃくな行為を黙って見過ごせなかった」とあるのがヒントになります。ほぼ同じ内容を１２字でまとめているのが、本文８ページ１７行目「ナチスの狂気と残ぎゃく性」ですので、ここが答えとなります。

問三（Ⅱ）本文８ページ７行目に、作者の考えとして「希望というのは、人間が生きるための大きなエネルギー源といえるだろう。」と述べられています。また、本文８ページ８行目「私が生き延びられたのは、希望を失わなかったからです」、本文９ページ「私には、希望だけが大切でした」とありますので、スタシャックさんも作者と同じ考えであることがわかります。ただし、ここでは「スタシャックさんにとって希望とはどのようなものか」と問われている点に注意が必要です。「どんなに過酷な状況にあっても」「生命の危機と言えるような状況にあっても」などの要素を必ず加えましょう。

問四　作者のファインダーの中に実際に見えているのはカロリーナではありません。八重桜の花弁と、若者たちの姿です。可憐なピンクの花が若い女性（この場合はカロリーナ）のほほえみを思わせるというのは、心情的に理解できますね。また、この「若者たち」に対して作者は本文８ページ５～６行目で「私は何だかうれしくなった。…かれらには、あふれんばかりの希望や夢があるように感じられたからだ。」ともあります。これらのことから、「未来のある若者たちは、希望や夢に満ちあふれているようで、よいものだなあ」「希望や夢に満ちあふれている若者たちというものは、未来そのものなのだなあ」というような感慨を作者が持っていると言えます。

問五　空欄部の直前に「塩のためでも、土地のためでもなかった。」を読んで、「なぜ『塩』と『土地』が並列されているのか？」と疑問を持った人がいるかもしれません。塩は人間の生命維持に不可欠な成分であり、かつ生産地が偏っているため、昔から洋の東西を問わず貴重で高価なものとして大切にされてきました。（ちなみに日本でも１９９７年まで専売制がとられており、政府の管理下にありました。）つまりエルナさんは「塩」も「土地」も「高価なもの、財産価値のあるもの」という意味で使っているのです。すなわち答えはアとなります。

問六　×なのはウとエです。ウは「作者は感じた」ではなく「エルナさんは感じた」でしたね。エは「強い意志と人間への信頼が悪運を変えることができる」の部分が間違っています。本文には「運、強い意志、人間への信頼、友だちの助け、生き残れるという自信、労働現場が屋外だったか屋内だったかという差が、生死を左右した（９ページ６～７行目）」とあります。